

# 山寺芭蕉記念館だより



雪景色の山寺と山寺芭蕉記念館

- 事業報告 企画展「山寺と紅花 III 一文化の伝承一」
- 「第10回山寺芭蕉記念館英語俳句大会」実施報告
- 収蔵品紹介 「早苗月」発句自画賛

No.30

2019年3月発行

# 企画展 山寺と紅花 III — 文化の伝承 —

貞観2年(860)に開山された山寺(宝珠山立石寺)は、古くから東北を代表する名刹として広く県内外から信仰を集め、最盛期には山内に多くの寺社を有するなど、栄華をきわめました。現在もその繁栄を窺わせる文化的品々を多数所有しています。一方、18世紀末における村山郡の紅花生産量は全国の半分以上に達し、うち八割が山形城下から出荷されるなど、紅花商人は高価な紅花の取引により大きな富を築くこととなり、その取引によって京・大坂との様々な文化的交流が生まれました。

本展は平成30年11月22日から平成31年2月17日まで開催され、立石寺の文化遺産と紅花商人によって伝えられた美術品の数々を展示しました。

## 1 立石寺の栄華

文化年間(1804-18)に山寺の遠藤周鶴によって描かれたのが「山寺宝珠山立石寺図」です。和紙を継ぎ合わせた縦171cm、横282cmの大きさで、彩色をもって描かれています。そこには今日では見ることのできない善行院、不動院、沢の院、極楽院などの寺院を見ることができ、一山のかつての繁栄を偲ぶことができ



県文 木製 曼荼羅懸仏 鎌倉時代 立石寺蔵

ます。県文「木製 曼荼羅掛仏」は、鎌倉時代中期の寛喜3年(1231)に立石寺院主によって奉納されたもので、十一面観音を中央に、釈迦・弥勒・薬師など8体の仏像を拝した直径92.7cmの大きさで儀範に依らない奉納者の意向が表されているもの。また、市文「木造 大日如来像」は平安時代後期のもので、明治期に大日窟という岩屋から発見されたものです。

## 2 冬の山寺 — 寄贈記念展示 —

雪景色の山寺を画家の故・武田敏雄が平成28年に130号の大画面に描いた「晴れ行く山寺」が、平成30年11月に寄贈されたのを記念して展示されました。武田敏雄(1938-2016)は山形県東根市生れ。平成15年(2003)、日展にて特選受賞し、平成19年には第60回記念示現会展にて文部科学大臣賞受賞。平成20年、日展にて二度目の特選を受賞しています。

### 3 紅花商人に伝わる文化



前赤壁図 森寛齋 筆 江戸時代  
㊦長谷川コレクション

江戸時代に紅花で富を得て今日まで続く商家で蒐集してきた文化財を紹介するものです。

「観音自画賛」(㊦長谷川コレクション・本館蔵)は黄檗三筆の一人に数えられる江戸期の僧侶・即非如一の筆によるものです。「前赤壁図」(㊦長谷川コレクション)は江戸後期に森寛齋(1814-)が描いたもの。宋時代の詩人蘇軾(蘇東坡)が黄州に左遷された時に7月、長江に遊覧して赤壁を詠んだものが「前赤壁賦」で、これを題材としたもの。蘇軾が友と船を浮かべて赤壁に遊び、酒を飲み詩を詠じていると山上に月が登って来た光景を詩のとおり描いた作品。

## 第61回記念 全国俳句山寺大会

蝉の声が届き始める平成30年7月8日、第61回全国俳句山寺大会は開催されました。

数多くの名句を生み出してきた記念大会の選者は「知音」代表 行方克己先生。兼題句選者に「汀」主宰 井上弘美、「樹氷」主宰 白濱一羊先生。地元選者として「鷹」同人松浦俊介先生、「春耕」「万象」同人 阿部月山子先生、「初蝶」同人「胡桃」主宰 鈴木正子先生「人」同人 三井量光先生。

俳句大会の事前投句数は1,300句余、大会参加者数97名で盛況でした。

大会式典は午前11時より相馬周一郎山形市文化振興事業団理事長の主催者挨拶、選者紹介、事前投句選評と続き、昼食を挟んで、お忙しい中をご出席いただきました佐藤孝弘山形市長のご挨拶をいただきました。



行方克己先生

続いて行方先生のご講演「旅と春秋」を拝聴しました。

引き続き入賞した俳句の発表、選評、そして事前投句、当日句の表彰が行われ、入賞者には選者染筆の色紙や句入りのこけし等が贈られた。俳句大会は午後4時に熱い高揚感を残し幕を閉じました。

事前投句の入賞句は次の通り

山形市長賞	山菜取り何より好きで蛇嫌い	河北町	後藤松溪
山形県俳人協会賞	離れては寄りては見上ぐ涅槃絵図	宮城県	星 節子
山寺文化保存会長賞	その奥に花頭窓あり山桜	村山市	小室けい子
山寺芭蕉記念館賞	父の日もいつもの父の読書かな	千葉県	菅谷貞夫

当日句で行方先生の特選に選ばれたのは

演壇に剪りしばかりの紅の花 京都府 辻本時子

# 「第 10 回山寺芭蕉記念館英語俳句大会」実施報告

同大会実行委員長 大場 登

「山寺から世界へ」と、2009年に始まった本大会も、節目の10回目。これまで支援をいただきました関係各位に衷心より御礼申し上げます。

さて、第10回は、従来の区分を改め、第1部(a)日本人大人、(b)外国人大人、第2部高校生、第3部中学生とし、4月上旬から6月上旬の2か月間募集。参加者総数1,215名、1,618の投句があり、これは前回の844名、1,319句を大幅に超えました。その最大要因は、高校生が前回461名、667句であったのが今回は、841名1008句に増加したことです。外国人大人の部では30か国(前回33か国)から164名(前回185名)317句(前回354句)の応募がありました。

審査は1次・2次の2回。飯島武久審査委員長他5名が担当。審査講評は、「外国人作品には秀逸なものが多い」「力作も多く、回を重ねるごとに質の向上が見られる」「冗漫な表現が減り簡潔な作品が増加」等の好評な部分と、改善してほしいことは、「高校生の部に、推敲が不十分な作品が目立った」「特に中高生の部に陳腐なテーマが散見された。例えば、桜、鯉 幟、サクランボなど」「俳句は、イメージを重視する表現媒体。物から物を連想させる表現の工夫と隠喩を大切に」などでした。

以下は、各部最優秀作品。

## 第1部(a):日本人(一般)

- ・寅屋 照夫(とらやてるお) (神戸市)

*A homecoming*

帰省子の靴玄関を占領す

*the hall occupied*

*by boys' sneakers*

*in a flash*

(作者訳)

## 第1部(b):一般(外国人)

- ・Indra Neil Mekala (India) (インド)

*ceasefire agreement...*

戦止み

*dust from the rubble settles*

瓦礫の中に

*on a crying child*

泣く<sup>おきな</sup>幼

(飯島 武久 訳)

## 第2部: 高校生

・ Mariyana Zhivodarova Zhekova (“Euroscool” School of English Language and Culture) (ブルガリア)

*Reading the last page*

書物置き

*Putting my book away*

現にまどう

*I feel lost on earth*

わが心 (万里小路 譲 訳)

## 第3部 (中学生)

・ Toni Kraljić (Primary School Vežica, 6<sup>th</sup> grade) (クロアチア)

*March wind*

春の風

*squeezes through the drywall*

トカゲ頭を

*lizard's head*

覗かせる

(万里小路 譲 訳)

## アプローチ・芭蕉&日本文化 12

### 芭蕉「奥の細道」黒塚の岩屋 — 鬼女伝説の地 —



松尾芭蕉が「おくのほそ道」行脚で妖怪伝説の地、那須の殺生石を訪ねている事の詳細は「アプローチ・芭蕉&日本文化 10 『おくのほそ道』と殺生石」でご紹介したところである。芭蕉はその他にも「おくのほそ道」の中で有名な妖怪伝説の地をもう一か所探訪している。それは奥州・安達ヶ原で鬼婆が出刃包丁で旅人の生き胆を取って

いたというむごたらしい鬼女伝説のある「黒塚」と「黒塚の岩屋」である。

「黒塚」は土が盛ってあり杉の木が植えられ、「黒塚」と刻んだ石碑が立っている。その近くにある真弓山観世寺の境内に鬼女が住んでいたという笠のような巨石を上部に載せた岩屋「黒塚の岩屋」がある。

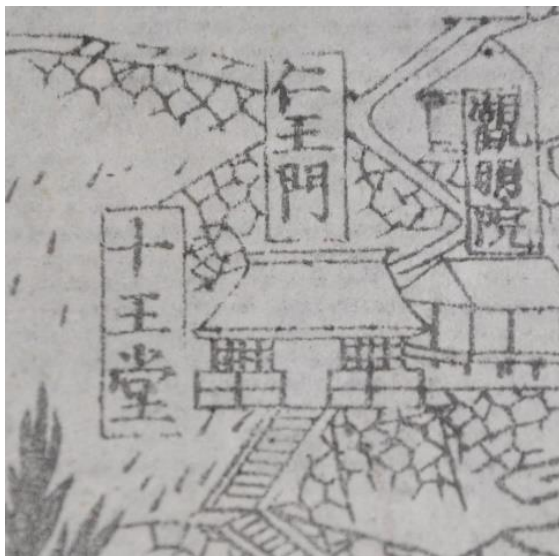
『曾良随行日記』によると、旧暦5月1日(新暦6月17日)に安達ヶ原の真弓山観世寺を訪れて、別当のお坊さんから黒塚について「杉を植えてあるところが鬼を埋めたところである」と説明を受けている。しかし、芭蕉の方は『おくのほそ道』には「黒塚の岩屋一見し」としか記していない。芭蕉は血なまぐさい鬼女伝説に多く触れるのは『おくのほそ道』にはそぐわないと考えたのではないだろうか。

(本館学芸員・相原一士)

## 仁王門 — 山寺立石寺の変遷の一つとしての —



仁王門



羽州山寺立石寺宝珠山略絵図（部分図）

各地に広がり、日本には平安中期以降に入ってきた。

仁王門建立以前の記録としては享保十一年（1726）出版の往来物『山寺状』に山寺立石寺一山の絵図が見開き2頁で描かれており、そこには門型の建物の絵に「十王門」と名称が付されており、十王堂も門型をしており十王門とも呼ばれていたことがわかる。

また、文久元年（1861）の「羽州山寺立石寺宝珠山略絵図」（図2）は仁王門となった後の絵図であるが、「仁王門」に「十王堂」が併記されている。仁王門建立後も新規制作の十王が祀られていることもあり、従来の十王堂という名称が暫くは根付いたままであったのであろう。

〔参考文献〕

（注1）『山寺百話』伊澤不忍 著・伊澤貞一 編 1991

仁王門（図1）はかつて十王堂と呼ばれる門であったが、嘉永年間（1848～1853）に偏明院情田僧正が十王堂の敷地を拡張して仁王門を建立した。この時、正面に仁王尊を祀り、側面に十王尊を祀る事とし、京都で彫った両像を奉納した。

（注1）

仁王とは、二王とも書き、金剛力士ともい

う。金剛杵をとり、口を開く阿形と、閉じた吽形の形を取ることが多く、守門神として二体一對とする。

十王は、冥府で亡者の罪業を審判する裁判官で、秦広王・初江王・宋帝王・五官王・閻魔王・変成王・泰山王・平等王・都市王・五道転輪王の総称。死者は初七日から七七日までの各七日、百箇日、一周忌、三回忌にそれぞれの王の序をめぐって来世の生れる所を定められるという。十王信仰は中国で唐末期から五代にかけて成立し、広く東アジア

# 「早苗月」発句自画賛

— 蕉門の僧侶・角上の視点を見る —



「早苗月」発句自画賛 三上角上 筆 江戸時代（18世紀）

三上角上<sup>かくじょう</sup>は江戸時代の僧侶で俳人。延宝三年（1675）生れ。近江国（現、滋賀県）堅田本福寺の十二世住職。法名は明因。別号は瞬七亭・夕陽観・百布軒。権大僧都法印に叙せられたが延享元年に退隠し、京都三条橋東に瞬七亭を結んで句作に耽ったが、後に同所が類焼したので近江国大津に帰って三井寺の近くに荷庵<sup>にないあん</sup>を結んび、延享四年（1747）没した。

角上は、本福寺の十一世住職であった養父の千那<sup>せんな</sup>と共に蕉門。元禄3年（1690）に刊行された蕉門の俳書『いつを昔』（其角編）に角上の句を見ることができる。また、寛保3年（1743）の芭蕉五十回忌には、芭蕉の墓所である大津の義仲寺に芭蕉翁行状碑を建てた。

本作は、句・画共に角上による自画賛。田植えの季節の重労働で目も落ちくぼむほどに疲れる農民に同情を寄せた句「早苗月目面も瘦て哀なり」と、疲れから田の脇でへたり込む農民の姿を描いたもの。鋭く伸びる筆跡は角上の特徴である。角上の俳画は、多く残されている。布袋を描いた作品もあって宗教者らしいと言えようが、本作の様に農民を描いた作品には他に、稲を背負う農民を描いた「稲運ぶ」発句自画賛（雲英文庫）がある。角上の仏道にも由来する慈悲心の視点とも評せられるが、農民の心情に配慮する視点に、蕉門の作風も影響しているであろうことも見逃してはなるまい。

## 山寺芭蕉記念館だより No.30

平成 31 年 3 月 30 日発行

編集・発行 公益財団法人山形市文化振興事業団

山形市大字山寺字南院 4223

電話 023-695-2221 FAX 023-695-2552

ホームページ <http://yamadera-basho.jp>

携帯サイト <http://yamadera-basho.jp/m/>